研究ノート

出羽国の観音信仰
－天童若松寺の懸仏をめぐって－

井野上 眞弓*

1. はじめに

目出度　目出度の　若松様よ
枝も　チョイチョイ
栄えて　葉も繁る
ハハーや　ヤッショ　マカショ
シャンシャンシャン

山形市では8月5日から7日までの三日間、山形県民謡「花笠音頭」に合わせて総勢1万3千人の踊り手が花笠を手に踊り進む「山形花笠祭り」が開催される。

ここで謡われる「若松様」とは山形県天童市の若松寺を指す。若松寺は最上三十三観音霊場一番札所、通称若松観音として親しまれてきた寺院であり、今日「西の出雲、東の若松」と称され、縁結びの観音様として人気を博している。

本稿は、この「若松様」が約50年間、花笠祭りで踊り継がれてきた背景には、山形の地に根ざした信仰の一端が、あるいは山形の地に生きた人々の心性を探ることができるのではないか、との立場から若松寺について、特に若松寺における観音信仰を取り上げるものである。

日本仏教研究、特に中世仏教研究を振り返ると、黒田俊雄氏の顕密体制論・権門体制論4、寺社勢力論5以降、黒田氏の顕密体制論を継承する立場6と異なる枠組みを構築しよう7とする二つの立場から国家と宗教についてアプローチがなされてきた。網野善彦氏の『中世東寺と東寺領荘園』8をきっかけに東寺・東大寺・興福寺・高野山等の中央寺院に関する研究は進んできているが、地方寺院に関する研究、とりわけ東国の寺院研究はまだまだ不十分である。ましてや山形の寺院については、人間

*東海大学文学部非常勤講師
田宣夫氏が「中世の松島寺」で立石寺を取り上げてはいるものの国家と宗教との視点からの研究は手薄であることは否めない。

観音信仰の成立については速水信氏の『観音信仰』が詳しい。紀元前1世紀のインドを起源とする観音信仰は、中国・朝鮮を経由して遡るとともに7世紀には日本に伝えられてきたと考えられている。速水信氏によれば、7世紀に除災招福の密教的現世利益信仰として観音信仰は広まり、8世紀には鎮護国家仏教の密教的現世的呪術思想の中核、9世紀には特定の寺院・特定の観音像に特殊な霊験があるとして参詣する国家仏教の一環になったという。また、10世紀初頭になると六道輪廻思想を基盤として発達した浄土信仰の広まりに伴い地蔵と並ぶ離縁核土の思想として貴族社会へと流布した。貴族たちの家庭の繁栄と自己の除病延命といった現世利益、さらには極楽往生を希求するものへと質的変貌を遂げ、12世紀には観音の三十三化身にちなんだ三十三所巡礼霊場が西国に成立し、13世紀に坂東、15世紀には秩父、四国において観音霊場が成立するなど、民衆へ広がっていったとする。

現在の山形県、出羽国における観音信仰については、伊藤清尚氏の研究があげられる。伊藤氏は、最上三十三観音霊場の成立は最上氏の領国経営に関わらず、最上氏が内陸部を平定した天正12年（1584）以降、最上氏の改易以前の元和8年（1622）までの間に現在の形が成立したという。また、仏堂に残された落書きと観音巡礼との関係に注目した三上信夫氏の研究「中世の仏堂墨書と地域社会」は興味深く、三上氏は若松寺観音堂の落書きが16世紀後半から17世紀前半の百年に集中していることを明らかにしながら、最上三十三観音巡礼の成立時期を落書きから16世紀後半から17世紀前半であろうと指摘する。

以上の研究状況を踏まえて本稿では、中世仏教研究では解明の途にある東国の、特に出羽国における寺院とその信仰形態の一端を明らかにすることを目的とし、さらには速水氏の総合的に網羅された観音信仰研究においても触れられることのなかった東国の、なかでも出羽国の観音信仰の実態について、若松寺と今日まで注目されることがなかった「若松寺金銅製聖観音懸仏銘」を取り上げて考察していきたいと考える。

２．若松寺と観音信仰

観音菩薩とは現世のみならず来世の救済にも利益ある菩薩として理解されるようになり、人々に広く流布していくことになるが、東国、特に出羽国における観音信
仰はいかにして受容されていったのであろうか。
若松寺は、寺伝によれば、和銅元年(708)行基によって開かれ、貞観2年(860)に円仁が堂塔を整備したと伝えられる14古代以来の天台宗寺院である。ここで出羽国における観音信仰の広まりを知るひとつの手がかりとして巡礼札を取り上げよう。若松寺に残された最古の巡礼札は延徳4年(1492)15そのものである。

図116 左より
西国三十三所巡礼納札
最上郡三十三度巡礼納札
西国三十三所巡礼納札
奉労修正観音一千座納札

これは西国三十三所巡礼に赴いた地元の住人が成就祈念に納めたと考えられるもので、この巡礼札から、15世紀には出羽国の人々が西国の観音霊場まで足を運んだことが理解される。
近年、三上喜孝氏によって最上三十三観音巡礼の成就祈願として納められたものは、文亀元年(1501)が初見であるとされた。さらに、三上氏は、15世紀半ば以降、観音霊場へ巡礼札を奉納する人が増加し、16世紀後半には堂内に落書すらもみられるようになってい17とも指摘する。このことは、伊藤清郎氏が、最上三十三所観音巡礼は天正12年から元和8年までの間に成立したとする説18にも合致する。
これらのことから、①15世紀半ばには巡礼の民衆化・世俗化が進んだこと、②出羽国においても遠く西国観音霊場に赴くものが現れるなど民衆に観音信仰が広まっていている様子と、③16世紀初頭には若松寺に観音霊場として人々が訪れるようになっているなど、④観音三十三所巡礼の展開としての最上三十三観音霊場が16世紀に成立していたことが確認されるのである。
すなわち、12世紀に成立し、13世紀に坂東、15世紀には秩父、四国へと広がっ
たといわれる三十三所観音巡礼が出羽国にも伝播し、15世紀になると出羽国から西
国観音巡礼へと向かう人々が現れた。これは、全国的にみられる巡礼の民衆化が出
羽国においても始まり、さらには、秩父や四国から一世紀ほど遅れた16世紀になる
と出羽国内においても最上三十三観音霊場が成立したということになろう。

3．若松寺金銅製聖観音懸仏をめぐって

霊場として整備される以前の若松寺について、さらに考察を進めたい。若松寺は、
現在、天童市大字山元に所在するが、中世においては成生荘といわれた場所ににある。
安元2年(1176)2月日付八条院頌目録20に「庁分御庄」として「出羽国大山　成生」
とあるのが初見で、鎌倉期を通じて皇室領であった。

図2-21 聖観音菩薩座像懸仏

観音堂内には、現在、金銅製の聖観音懸仏が奉納されている。鏡板の裏面にある
銘文21には、以下のような文字が刻まれている。

当庄(成生庄) 御政所芳ノ比丘尼高木比丘尼
敬白　若松寺御宝前
奉　懸聖観音御正体
右志趣為一紙半銭経縦
助成之人々現世者至于七代
令守護給後生者同成蓮花実矣
弘長三季癸亥五月八日
大檀那藤原真綱敬白

- 100 -
縁友藤原氏女

三位氏女 纪葉光

この懸仏は、直径が75.7センチメートルと大型であり、鏡板の中央には聖観音菩薩坐像が取り付けられている。その大きさと技巧の優れていることから鎌倉、あるいは京都などの中央で製作されたものと推察される。上の銘文を見ると、成生荘の政所「芳ノ比丘尼」と「高木比丘尼」という二つの女性と、大檀那藤原氏と「縁友藤原氏女」、つまり藤原氏の妻、さらには「三位氏女」という女性が懸仏を寵納に関わっていることがわかる。少なくとも四人の女性の名前が見え、女性たちによる作善であったことは興味深い。政所や檀那の呼びかけに応じて「一紙半銭」の結縁助成した人々が、現世では七代に至るまで守護され、来世においては「蓮華実を成すため、すなわち現世利益と極楽浄土への往生を祈願するために弘長3年（1263年）に懸仏を傘下にという趣旨が刻まれている。

以上のことから、速水氏によって指摘された10世紀以降にわたり自家の繁栄と除病延命といった現世利益、及び極楽往生を希求する二つの願いを合わせ持った中央貴族の観音信仰の形態がすでに13世紀の出羽国において確認されていたといえよう。加えて、貴族社会において広まった浄土信仰と結びついた観音信仰が13世紀の東国に伝播したひとつのモデルケースともいえよう。

4. 女性と観音信仰

さて、ここで「若松寺金銅製聖観音懸仏銘」にみえる政所の女性について考えておきたい。

天童市には大字高木という地名があるので、そこで住人の「高木比丘尼」ではないかと考えられるが、落合義明氏は、「高木比丘尼」を肥前の御家人高木氏関係者ではないかとして、その可能性を探る29。落合氏によれば、高木氏は、藤原隆家の子孫として肥前に土着し在庁官人から武士化した氏族であり、また、成生荘に時宗（浄土宗）を広めたとする一向仏も高木氏の流れの草野氏出身であるという。さらに一向仏の母方の父藤原兼房を文治元年（1185）以前からの出羽国の知行主であったとも推察できることから、出羽国ゆかりの人物であったと考えられるという。この落合氏の見解に従えば、「高木比丘尼」とは、高木氏、または草野氏の縁者とも考えられる。とすれば、高木氏、または草野氏に連なる「高木比丘尼」や「三位氏女」
のような高貴な女性と、藤原真綱らが協力し、中央の工人に依頼して懸仏を製作・奉納したと考えられるのではないか。

いずれにせよ、13世紀の出羽国（若松寺）において複数の女性たちの結縁がなされ、不特定多数の人々が集う観音霊場が存在したといえよう。

ここで、女性と観音信仰について考えてみたい。現世七代の守護と来世での極楽往生を祈願して懸仏を若松寺に奉納した女性たちの姿を13世紀の出羽国に探すことができたが、畿内ではそれに先んじて12世紀に西国三十三所霊場巡りが成立している。なかでも長谷観音、石山観音、清水観音など地主神と結びついた固有の霊験を持つ寺院は女性たちの信仰を集めた。『更級日記』の作者の母は「初瀬には、あおおそろし、奈良坂にて人にとられなばいかがせむ。石山、関山越えていとおぞろし」と恐れて僧に代参させたというが、それほど恐ろしいと感じながらも、身の危険を伴いながらも功德を積むべく遠方の長谷寺や石山寺まで足を向けている。一方では、風光明媚な道中が貴族の女性たちの遊興の場として頻繁に参詣された側面も見逃すことができない。観音霊場を訪れる女性たちの参詣は徒歩がほとんどであったりことから、長い道のりに多くの時間を費やして詣でていたはずである。例えば、正暦4年（993年）の藤原行成の長谷参詣は往復五日を費やしたらしく、女性であれば、ましてやそれ以上の時間かかったであろうことは容易に想像できる。けれどもここには、宗教的救済の希求のみならず、現実の生活からの逃避や心の癒しとして、あるいは楽しみとしての霊場参拝の側面もあったのであろう。もちろん、それは単なる霊場ではなく観音霊場であることに関与がある。

周知のことであるが、女性の仏教信仰は様々な制約を有する。女性禁遊の問題である。仏教教典においては、女性は五章三従の身であって救われないとされる。地獄の使者ともされる。そのため、比叡山や高野山などの寺では女人結界を張り、女性の立ち入りを厳しく禁止してきた。また、女性は従生の妨げになると考えられてきた。さらに、我が国の仏教＝仏法は、王法に準ずるために清浄であるとし、国家祭祀において産穀・血穀・死穀などを避けようとする観念が成立する。国家のために法会を修し、天皇のために祈るゆえ死穀と血穀を排除しようとした。仏法が国家のために法会を修し、天皇のために祈るのであれば、当然、貴族が避け、神祇も避けた「穀」を遠ざけなければならない。ここから寺院は女人結界を定め、女性を結界の外に追いやりることとした。

しかし、それでも女性たちは心を仏に依頼救済を求めて祈ったのであり、だからこそ、現世利益と極楽往生、すなわち現世と来世において救われるとして女性に門
戸を開き、霊験と霊告を授けようとした観音霊場に女性たちは集ったといえよう。

ここで若松寺に戻って考えてもみると、若松寺は標高約400メートルに位置し、生花寺からは約10キロメートルの距離にあったと推察される。日常生活の場から離れ、困難であるが女性の足でも詣でることのできる距離に若松寺が位置していたことから、前述の「芳乃比丘尼」と「高木比丘尼」、大檀那藤原氏の妻と「三位氏女」の四名が参詣し、懸仏を奉納するなど若松観音への信心を深めたであろうことが推察されるのである。

5. おわりに

以上、若松寺と観音信仰について、「若松寺金銅製聖観音懸仏銘」を取り上げながら考察を進めてきた。まず、懸仏銘からわかったことは、13世紀の出羽国において、比較的身分の高い女性たちは懸仏を観音霊場である若松寺に奉納した事実である。女性たちは現世での七代までの守護と、来世における極楽浄土を祈願し弘長3年(1263)に懸仏を奉納したというが、この「七代」の守護の文言には、中世における家制度・家族制度の成立の影響をみるとことができるのかもしれない。

懸仏の銘文解読を通して、今まで捉えられることのなかった出羽国における観音信仰の実態が明らかになった。速水氏の説く10世紀からの自家の繁栄と除病延命といった現世利益と極楽往生の両を願う観音信仰が13世紀の出羽国において確認されたのである。またそれは、貴族社会に広まった観音信仰が11世紀後半から12世紀末へと時間を経て坂東や四国へ展開し、出羽国においてはさらに遡れて伝播したものであり、そのモデルケースとして若松寺の観音信仰を捉えることができる。

その上、観音霊場の巡礼への民衆化・世俗化は、ここ出羽国では15世紀半ば以降に確立していき、最上三十三観音霊場も成立していった。

このように本稿で明らかにできたことは、13世紀における出羽国での女性による観音信仰の事実と16世紀に出羽国で観音霊場が成立したことである。出羽国での最上三十三所観音霊場の成立によって、遠く西国観音霊場巡礼に赴くことのできない地方の民衆、特に女性を彼の地へとりざなったのではないだろうか。また、霊場へ向かった女性たちにとって信仰はもとよりリクリエーション的性格も有していたのであろう。

新城常三氏によれば、時代が下って江戸時代になると三十三所観音霊場の地は全国164カ所にまで及んだという。これら地方観音霊場巡礼の普及は、篠摺・納札・
巡礼歌など西国巡礼の慣行・風俗が地方巡礼にも摂取・継続され、非信仰的な日常生活にまで融合して一般的習俗へとなってきいたとも考えられる。

とすれば、民衆の日常生活の深層に定着していった巡礼の習俗と若松観音への信仰が、今日の山形における花笠祭りの菅笠として姿を残し、今日まで「若松様」と謡い継がされてきた基層文化として存在しているのかもしれない。

また、縁結びを願い、バーゲンスポットとして若松寺に詣でる多くの女性たちの心性には、中世の女性たちが七代までの守護、つまり子孫と家族の繁栄を願った現世利益の観音信仰が、結婚・良縁の祈願へと転化しつつも今日まで続いているその一端をうかがい知ることができるのではないだろうか。

若松寺は、山形県村山地方にみられる江戸時代以降の風習「むさかり絵馬」の奉納が現在も続いている数少ない寺院のひとつでもある。32 「むさかり」とは婚礼、または花嫁を指し、未嫁のまま亡くなった子どもの供養に「せめて死後には結婚を」と願って「むさかり絵馬」を奉納する。死後の結婚の祈願には、何を幸福とするか、この地に生きる人々の価値観や結婚観、家族観、ひいては人生観もが反映されている。

今後は、16世紀以降の若松寺の信仰について明らかにし、さらには、出羽国における宗教と社会の有り様について考察を進めることを課題としていきたい。

1 山形花笠祭りは観光基本法が制定された昭和38年（1963）、蔵王の観光開発及び宣伝を目的に開催された蔵王夏祭りのイベント・花笠音頭パレードに始まる。昭和40年（1965）から「はーあ やっしょお まかしょ シャンシャンジャン」の掛け声とともに、山形市内をお囲し・大勢に合わせて踊り進む現在の山形花笠祭りの形になった。この時期、日本政府は「多自然居住地域」である地方の小都市や農村漁村の地域振興政策の一つに観光を据え、大量観光、大衆観光を視野に観光政策を本格化させた。日本経済では高度経済成長期にあたる。昭和35年（1960）の国民所得倍増計画政策、昭和37年（1962）の全国総合開発計画と太平洋ベルト地域の工業化推進の時期であり、昭和39年（1964）には東京オリンピックが開催された。IMF条国、ガット11条国となりOECDに加盟するなど日本は先進資本主義国への仲間入りを果たし、海外旅行も自由化されるなど、日本国民の生活は豊かになり、国内外を含めた観光旅行への関心は深まった。このような時代、または社会背景のもと、山形花笠祭りは官民あげての山形への大量観光、大衆観光政策の一つとして成果をあげ、毎年90万人を超える見物客が訪れる祭りとして今日まで続いてきている。この山形花笠祭りが50年以上続いてきた背景を考えることは、日本人の信仰のあり方、及び日本の伝統文化を考える上で、さらには、今日の観光を含めた地方政策を考える上で興味深いとも考えられる。

2 特に2007年（平成19）からは氏家家業修職班と握手すると良縁に恵まれるといわれ、バーレスポートの一つとして人気を博している。（山形新聞 2015年9月30日朝刊）
観音信仰とは、観音菩薩に対する信仰全般を指す。
黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』岩波書店 1975年
黒田俊雄『寺社勢力』岩波書店 1980年
平衛行『中世仏教の成立と展開』(『日本中世の社会と仏教』塚書房 1992年)、佐弘
夫『神仏・仏教の中世』法華館 1998年、上島孝『日本中世社会の形成と仏教』名
古屋大学出版会 2010年などがあげられる。
佐々木馨『中世国家の宗教構造』吉川弘文館 1988年、松尾剛次『鎌倉新仏教の成立』
吉川弘文館 1988年などがあげられる。
網野善彦『中世東寺と東寺領荘園』東京大学出版会 1978年
入間田宣夫『中世の松島寺』(渡辺信夫編『宮城の研究』、清文堂出版、1983年)
入間田氏は、立石寺が北条時頼の外護を得て関東御祈禱所となり、それに伴って天台宗
から禅宗へと転換を図ったものの、鎌倉幕府滅亡後は再び天台宗へと戻ったことを指摘
し、南北朝の動乱に巻き込まれた地方寺院・山形の寺院の有り様と中央政権との関わり
について考察している。
遠水侑『観音信仰』塚書房 1970年
伊藤清雄『最上氏領国と最上三十三観音霊場』(『村上民謡』21 2007年)
三上喜孝『中近世仏教史と地域社会』天童市若松寺観音堂史書の調査をふまえてー』
(『山形大学大学院社会文化システム紀要』2009年)
山形県立博物館『図録・特別展 若松寺の歴史と遺宝 −若松観音 1300年のあゆみ』2007年
山形県立博物館『図録・特別展 若松寺の歴史と遺宝 −若松観音 1300年のあゆみ』(前
掲書) p.58
山形県立博物館『図録・特別展 若松寺の歴史と遺宝 −若松観音 1300年のあゆみ』(前
掲書) p.58
三上喜孝『落書きに歴史をよむ』吉川弘文館 2014年参照。
伊藤清雄『最上氏領国と最上三十三観音霊場』(前掲書)参照。
現在我の天童市全域にあたる。財団法人山形県埋蔵文化財センター『山形県埋蔵文化財セ
ンター調査報告書二階堂氏屋敷遺跡発掘調査報告書』2002年参照。
『山形県史古代中世史料1』 p.924
山形県立博物館『図録・特別展 若松寺の歴史と遺宝 −若松観音 1300年のあゆみ』(前
掲書) p.39
『山形県史古代中世史料2』 pp.321-322
落合義明『出羽の屋敷と武士団』(中島圭一編『仏題十四世紀に何が起こったか』高
志書院 2016年刊行予定)参照。
吉田直人『近畿観音霊場と文芸』(『国文学 解釈と鑑賞』742 1993年) p.65-66
遠水侑『観音信仰と霊験利益』(『岩波講座 日本文学と仏教』第7巻 霊地 岩波書
店 1995年) p.11
遠水侑『観音信仰と霊験利益』(前掲書) p.65
西口順子『女の力』平凡社選書 1989年 pp.10-11
遠水侑『観音信仰』(前掲書)、西口順子『王朝仏教における女人教説の絡み』(宮田
登編『性と身分』春秋社 1989年)参照。
財団法人山形県埋蔵文化財センター『山形県埋蔵文化財センター調査報告書二階堂氏屋
敷遺跡発掘調査報告書』2002年参照。
新城常三『新潟県寺参詣の社会経済史的研究』塚書房 1982年 p.461
新城常三『新潟県寺参詣の社会経済史的研究』(前掲書) pp.1112-1122
山形県立博物館『図録・特別展 若松寺の歴史と遺宝 −若松観音 1300年のあゆみ』(前
掲書) pp.23-24
山形県立博物館『図録・特別展 若松寺の歴史と遺宝 −若松観音 1300年のあゆみ』(前
掲書) p.82